

〔 社会問題の顕在化と早稲田大学 〕

梅 森 直 之

(初期社会主義研究会／政治経済学術院教授)

*司会：

それでは、引き続きまして報告2、社会状況の変容と早稲田大学に移らせていただきます。

梅森先生、お願いいたします。

こんにちは。梅森と申します。それでは、私の報告に早速ですけれども入らせていただきたいと思います。

本日私に与えられましたタイトルは、1900年前後の早稲田大学と社会問題との関わりを考えるとということでもあります。このテーマを考える上で現在から見ると忘れられがちな点の一つがあります。それは、社会問題という場合の「社会」という言葉が、この時代にもった新しさであります。社会というのはもともと翻訳語でありまして、society、もしくはsocial、これを一体どう訳すかということは近代の日本にとって非常に大きな問題でありました。自由で平等な人間同士の関係というものが近世においては存在しないわけですから、そうした人間関係を示す「社会」は、単にどうその言葉を訳すかという以上に、どうやってそうした関係を作り出すかという大きな問題だったわけです。この言葉に対して、福沢諭吉が「人間交際」という訳を最初に充てたということはよく知られています。もしこの訳語が定着していたとすれば、きょうの私の報告は、「人間交際問題の顕在化と早稲田大学」ということになっていたかもしれませんし、初期社会主義研究会という私の所属する研究会は、初期人間交際主義研究会ということになっていたかもしれない。この訳は私は個人的に非常に名訳であると思います。

それでは、なぜ社会という言葉がこの時期クローズアップされて、そしてそれが人口に膾炙するようになったのか。この背景について少し簡単に説明させていただきたいと思います。まず1つは、日本の工業化の進展ということ、これがあるわけです。日清戦争を経て産業的な高度化が進んでいく。そういう中で、さまざまな病理的な、かつてなかったような問題というものも新たに登場してくる。それが次の報告で主題になります公害問題であったり、そしてこの報告の主題となる貧富の差、新たな格差問題の発生であったと思います。

それからもう1点は、1902年に東京専門学校が早稲田大学に改称されたことと関わってくる問題ですけれども、国家機構が整備されていった。逆に言うならば、官僚制化が進んでいったということです。これは一見、安定的な社会が成立する上で良いことのように思われるのですが、他方で明治初期にあった自分の能力次第でどんどん立身出世していくというような開放的な空間というものが閉ざされていく、そういう状況であったということです。

こうした新しい問題の発生、そして、新たな閉塞感、そういうものに着目した場合に、この社会問題、そして社会主義というこの世紀転換期の用語は、そうした新しい問題に苦しむ人たちに、それが決して個

人の罪ではないと。もしくは、単なる運不運の問題でもない。それは実は社会構造の問題なんだという形で、そうした問題をとらえ直すための新しい眼鏡を提供したというふうにも言ってもいいのではないかと思います。それが非常に新鮮なものであったということを一方で考えておきたいと思います。

それでは、次のスライドにいきたいと思います。ちょっと写りが悪くて残念なんですけど、これは1901年にある結社が結成された時に送られた届であります。このところに、神田警察署というのが見えます。神田警察署に送られた結社届書ということです。この結社届というものは実際にはあまり役に立たなかった。すなわちその結社は、すぐに結社禁止の憂き目に遭うわけです。そしてこの結社が他ならぬ社会民主党という結社であったわけです。これは1901年のことでした。

この結社届とともに、社会民主党の宣言というものが送られております。この社会民主党宣言というものを今日改めて読み返しますと、そのグローバルな視野の広さというものに改めて感じ入るところがあります。少しだけ読ませていただきたいと思います。こういう言い回しで始まるんですね。「いかにして貧富の懸隔を打破すべきかは、実に20世紀における大問題なりとす……。もし直截にその抱負をいえば、我が党は世界の大勢に鑑み、経済の趨勢を察し、純然たる社会主義と民主主義により、貧富の懸隔を打破して、全世界に平和主義の勝利を得せしめんことを欲するなり」と。社会民主党は、極東の島国のすぐ結社禁止されるような小さい団体でありましたけれども、その目指すところは全世界に平和主義の勝利をもたらすことだというわけですね。こうしたグローバルな問題の立て方ですね。改めて非常に強く印象づけられる点です。

この気宇壮大な宣言を書いた人物、これが東京専門学校と密接な関係を持っておりました安部磯雄です。これは社会民主党を結党した6人のメンバーの写真です。安部磯雄はこの人物に当たります。安部磯雄は福岡県に生まれて、同志社大学に学んだ後、1881年から95年までアメリカのハートフォード神学校に留学いたしました。で、1899年に東京専門学校の講師に就任したばかりでしたから、この1901年という結党はまだ東京専門学校の講師になって間もない時期であったということになります。安部は後に教授になり、そして1949年に亡くなるまで早稲田大学と密接な関係をもった非常に重要な人物であるということは皆さんご存知のとおりだと思います。

あと、ご存知のように、安部はもう一つ社会主義者以外の顔がありまして、それは学生野球の父としての顔であります。安部と野球が思想的にどう結びつくかということはなかなか難しい問題で、なぜかというところ、安部自身は野球の経験はないんですね。彼が熱心にやったのはテニスでありまして、それなのに野球こそ学生の知徳を発展させるのに最適のスポーツであるということで学生野球を全面的に推進する役割を担います。その延長線上に現在の早稲田の野球部の活躍があるということです。

なぜ野球なのかということを読んでもなかな面白く書いてありまして、テニスというのは安全過ぎるというんですね。それに比べて野球というものは、ひょっとすると怪我をするかもしれない。ひょっとしたら命の危険をちょっとだけ感じるかもしれない。そのぐらいの危険がないとなかなか知徳というものを伸ばすことはできないんだという、かなり物騒なことを言っています、この後にご説明するような絶対平和主義の社会主義者の顔とはちょっと違った顔が見えて非常に面白いものがあります。

それから片山潜、この人はご存知のとおり、戦前の最も有名な国際共産主義者で、最終的にはソ連に渡ってそこで亡くなりました。あまり知られていないことかもしれませんが、片山は1896年に日本に帰ってきた後、東京専門学校の英語学部の主任講師として英語を教えています。ただ残念なことに、3カ月で解職になっておりまして、その解職の理由は、英語を教えずに社会主義ばかりを教えていたからだというふうに言われております。

それからこの人物が木下尚江です。彼は、1886年に東京専門学校（現早稲田大学）の法律科に入学して、88年に卒業しました。この当時は毎日新聞の花形記者として活躍している時代であります。それから、これが西川光二郎という人でありまして、彼も札幌農学校を経てやっぱり東京専門学校に1896年から1899年まで学んだ人物であります。その他の人を紹介いたしますと、この人物については恐らく説明の必要はないと思いますけれども、幸徳秋水ですね。それからこの若い人物が河上清でありまして、この人はこの後アメリカに渡って在米ジャーナリストとして活躍いたします。

ここで改めて驚くことは、こうした社会民主党という新しい社会問題に実践的に対処するという運動が起こった時に、実に6人中4人が東京専門学校に直接関係を持った人物であったという事実であります。この事実そのものがそうした現実の社会に発生するさまざまな問題に対して敏感に反応していくという、その当時の大学の空気、もしくはそのあり方を象徴的に示していると言えるのではないかと思います。

本日の報告では、時間の関係もありますので、この社会問題というものの質と広がり、2つのテキストを対比的に見ることによって考えてみたいと思います。これがその2つのテキストであります。1つは安部磯雄が著しました『社会問題解釈法』というテキスト、これは1901年に出版されたものです。当時の東京専門学校出版部から出たものです。これは非常に有名で、安部磯雄という人物や社会主義の歴史を語る際にはかならず触れられるテキストであります。それに対してもう1つのテキストですね。煙山専太郎という人が書きました『近代無政府主義』というテキストであります。これが1902年に出版されています。この煙山専太郎は、この1902年から早稲田大学、東京専門学校で西洋史を教える講師として赴任し、その後ずっと早稲田で教鞭をとった人物であります。この2つのテキストが1901年、1902年という社会問題が噴出した時期に、共に早稲田大学から出たことの意味、そこには非常に大きいものがあつたのではないかと、これが私が今日お話ししたいことがらであります。これからそのテキストの内容について、少し話させていただきたいと思います。

まず、安部磯雄の『社会問題解釈法』についてです。ここでいう解釈というものは、今の言葉で言えば解決ということに等しいわけですね。すなわち、社会問題を解決するには一体どうすればいいかということ、これを著した本であります。非常に面白いことに、ここで安部は非常に明確に、社会問題というものはsocial problemsではないんだと。すなわち複数の問題があるのではない、The social problemしかないんだと。すなわち唯一の社会問題しかないと述べていることです。その唯一の社会問題というのは何かというと、これは貧困問題であります。だから、社会問題の解決というのは結局貧困問題を解決することになります。安部は、その貧困問題の原因として3つの主な原因があるというふうに言うわけですね。その第1は、生産が不完全であること。2番目がさまざまな浪費が行われているということ。そして3番目に分配が不公平に行われているということ。そしてその解決法を提案するために、主に5つの方策を順次あげながらその妥当性を検証していきます。すなわち、1は慈善事業、2は教育、3は労働組合運動などの自主的な自助的な事業。そして4番目が国家的事業、国家による政策ですね。こういうことを見た後で、結局、これらは弥縫的な解決策でしかない。根本的な改革としては、社会主義しかないんだと。ここで社会主義というものは一体どういうことかということ、生産機関を悉く公有となして、国家が年々産出するものを人口に応じて分配することを意味しています。これが社会主義の内容ということになります。

今のが非常に簡略化した形でのこのテキストの紹介ですけれども、もう2つだけこのテキストの非常に大きな特色というものを付け加えたいと思います。それは安部がこの社会問題というものを徹頭徹尾、都市問題としてとらえているということです。都市というものには人口がどんどん集まってくる。人口が多くなると、そこで競争が激しくなる。その結果、貧富の差が生まれてさまざまな問題も生まれて

くる。安部が社会問題を都市という空間において考えていたということ、これが第1のポイントです。それから第2点目としては、人間の合理性であるとか、それから進歩というものについての非常に楽観的な期待というものが強くあったことです。例えば彼は、現在の生産が不完全だという状態についての解決方法というものを述べたところで、今の我々の社会において蒸気であるとか、電気であるとかいうことを十分に利用しさえすれば、我々の生産力というものは1日3～4時間になります。それくらい労働すればそれで済むという世の中がくる。こういうふうに、非常に楽観的な未来像というものを描きつつ、社会問題について一つの光を当てたというふうに言えると思います。

安部のテキストというものは、そうした楽観的な未来の豊富な実例というものを含んでいまして、それは彼自身が親しく見聞したアメリカの大都会、そしてドイツの大都会において、さまざまな公有の試みが行われているということでした。彼はそれを社会党の発展と絡めて説明した上で、日本もそうした段階に入るべきだということを強く主張したのです。

それに対して、この煙山専太郎の『近世無政府主義』という本は、ある意味非常に対照的でありまして、まず何が対照的かという、扱っている対象がロシア中心なんですね。ロシアにおけるニヒリズム、虚無主義を無政府主義との関係において非常に詳細に描いています。煙山がこの本を著した意図は序言に明らかでありまして、近年、国際的に無政府党のテロリズムというものが非常に活発に行われていて大きく問題になっている。しかしながら、誰もなぜそういうものが起こるのかということについてきちんとした研究をやらない。だから、私がその研究をやるんだというわけです。あくまでも自分自身はそうした虚無党、もしくは無政府主義というものに対して批判的なスタンスをとるということ、これを明確にしているわけでありまして。

しかしながら、このテキストは、非常に微細に虚無党の運動というものを歴史的に追っているが故に、読者の側は、その記述を読むことで、無政府党の情念であるとか、心情であるとかいうものを必然的に理解してしまうんですね。著者の主観的意図とは別に、そういう構造をこのテキストはもっている。主観的には無政府党の暴力的なテロリズムを批判するといいいながら、同時に、なぜそうしたことが発生するのかということを説明する上で、ロシア政府の非常に専制的なやり方であるとか、それからロシアの農村の非常に停滞ぶりであるとか、そういうことが細かに書き込まれていくわけでありまして、一方で読者の側は、そうしたロシアの状況に絶望し、立ち上がっていく虚無党の情念というものに共感してしまう。これは一面で、そういう恐ろしいテキストになっていると思います。

もう一つ安部のテキストとの対比で興味深いものは、このテキストが対象として描いている場所が、農村であったり、移民であるということです。無政府主義であるとか虚無党というのは、農村から出てくる移民のネットワークを通じて力を発揮していくわけですから、必然的にそういう形になってしまう。これは先進国の都市を中心に社会問題を考えていった安部のテキストとは非常に対照的なアプローチです。

この写真の人が煙山専太郎です。煙山はこのテキストで、無政府主義者、もしくは虚無主義者によって実行された暗殺事件というものを時系列的に並べて説明していくわけですが、驚くべきはそこに1901年の事例まで含まれていることです。1902年にこの本が出ているわけだから、ほぼ同時代的なレポートとしてこの作品を書いていたことになります。

社会問題のあらわれ方とそれに対する対処を描いた非常に対照的な本が同じ早稲田から1901年、1902年と、ほぼ同時期に出たということ、これを私は非常に大きな意味を持つ出来事として考えます。これは、私は単なる偶然ではないと考えます。いわば近代の日本の状況が、こうした2つのテキスト、2つの社会

問題に対する対処というものを、いわば必然として呼び寄せたのではないか。一方で都市化というものが進むと、大都市では西洋並の生活条件というものがどんどん整ってくる。そうした場所では、当時のアメリカやヨーロッパの大都市に匹敵するような問題も、すでに早発的に表れてきている。ただし、他方で、やはり農村においては非常に前近代的なさまざまな抑圧というものが存在し、そこから派生する問題が多くの人々を苦しめていた。こうした二重構造こそが1900年代の日本というものを特徴づける構造でありまして、これは1900年代に限らず戦後に至るまで日本の社会状況というものを特徴づけてきた、そうした根本的な条件ではないかというふうに思います。

したがって、こうした問題を考える上では、恐らく安部的な合理的、そして都市的なアプローチだけでは不十分で、そこに煙山のような農村から移動する人々の情念をもとり込んだ解決の方法が採られねばならないことになりましょう。このどちらか一つであってはやはり不十分であって、この2つがそろって初めて社会問題、グローバルな社会問題の全体性が見わたせ、そして、それに対する対処の仕方も構想しうる。そのような意味で私はこれらの本が2冊そろってこの1901年、1902年に出たということ、この意味を強調しておきたいと思います。

やはりここまで考えてきてみてあらためて思うことは、早稲田大学というこの場がいかにかグローバルな世界に向けて開かれた場所であったかということです。世界で起こっているさまざまな事件、一方ではヨーロッパの大都市で起きているさまざまな社会改革、他方ではさまざまな社会の根元的な矛盾によって引き起こされる暗殺事件、そうした両方の情報が開け放しの部屋のようにそこに入ってくる。そして、そこでそれに感応していた人たちがそれについての深く真剣な考察を行う。そして、それをさらにまた世界に向けて発信していくということが行われていたのです。これは早稲田大学の歴史を考えるうえで非常に重要なポイントではないかと思います。

2つ事例をあげて考えてみたいと思います。このスライドは安部磯雄がかかりました1903年に創刊される『平民新聞』という新聞です。これがその紙面なんですけれども、この新聞、やはり今から見ても非常に志が高いと思うのは、英文欄というものを5分の1のスペースを使って設けている点ですね。ここで自分たちの主張を単に日本語だけではなくて、英語で世界に向けて発信することがおこなわれていたのです。この英文欄を執筆していた人物が安部磯雄であります。ちょうどこの号のここで書かれている内容が、「ロシアの社会主義者たちへ」という形で、ロシア宛に名差されたメッセージでありまして、この時、日本とロシアは日露戦争で戦争をしているわけですね。その相手国のロシアの社会主義者に向かって、社会主義者にとって人種、地域、国籍の別は存在しないと。我々は同志であり、兄弟姉妹であり、何ら戦うべき理由がないという訴えを行っています。この訴えはロシアの社会主義者に大きな影響を与えて返事がくるわけなんですけれども、それに限らず全世界の社会主義者たちからも非常に大きな反響を呼んで、世界のさまざまな社会主義の機関誌に転載されるということが行われました。

このメッセージの中で安部は繰り返し、政治闘争においてはいかなる武力も絶対否定する、絶対拒否すると、すなわち平和的な方法で我々はあくまでもいくのだという宣言を行っています。しかしながら、やはり一方で専制政治があり、自由に発言もできないという状況というものがあつた以上、世界的に見るならば、やはりテロリズムの運動というものも決して収まることのないわけですね。煙山の本は、そうしたテロリズム事件を1901年まで記録しているわけですが、これに対し、最近2006年に出版されたベネディクト・アンダーソンの『三旗の下に』という本は、その後の時代のアナキズムの国際的なネットワークの問題を扱っております。

このテキストによりますと、その後も1910年、1910年代半ばまで、アメリカやヨーロッパを中心に、や

はり暗殺事件、テロリズムというものが頻発するということになります。ここで注目していただきたいのが、アンダーソンがこうした問題の中に、ハルピンにおける銃殺事件を入れていることです。これは言うまでもなく、1909年に起きました安重根による伊藤博文の暗殺事件であります。ここではそれを、一連のグローバルな流れの中に位置づけているわけです。

この1909年の安重根の事件というものが一つのきっかけとなりまして、非常に警戒感を強めた日本政府が、翌年大逆事件というものを引き起こして、天皇に対するいわゆる組織的なテロリズムの企てというものをでっち上げて、日本の社会主義者というものを一網打尽にしようとした。そういう状況の中で、先ほど社会民主党の中にいました幸徳秋水も絞首刑になります。それが1911年のことであります。

最後にまとめをさせていただきたいと思います。こういうふうに見てくるならば、小野梓が1870年という非常に早い時期に、次のように述べていることの意味が改めて胸に迫るわけです。彼は何と言ったかという、「今や人文方に開け、舟車の用は其の妙を極め、加之、電気・通信は瞬息に天下至るべからざるの地なく、通ずべからざるの信なし。是れを以て之れを視れば、即ち天下已小と謂うと雖も可なり。」、電気電信がその瞬息につながる時代、天下はもう小さくなっている、世界は非常に小さくなっているということを述べている。これは現在の言葉でいうと、情報のグローバル化ということになると思います。我々は早稲田大学、そしてその前身の東京専門学校が、既にこうしたグローバル化の時代のただ中で生まれたのだということに、改めて思いをいたす必要があります。そしてそこには、世界におけるさまざまな動き、ポジティブなものもネガティブなものも、好むと好まざるとにかかわらず入ってくるわけですね。そして、それがまたさまざまな形で、さまざまな場所へと波及していく。そうした状況の中で大学の様々な活動が行われていたということ、これを改めて感じとることができます。

われわれはこうしたグローバル化というものがもつ可能性と危険、その両面に直面しながら生きていかなければならない。この状況は恐らく当時も現在も変わらない我々の時代の宿命ではないかというふうに考えます。以上で報告を終わらせていただきます。(拍手)

*司会：

ありがとうございました。

社会問題の顕在化と早稲田大学

1900年前後は、日本における社会主義思想の本格的導入の時代として知られる。そして早稲田大学は、社会主義の導入・展開・発展にきわめて重要な役割を演じた重要な現場のひとつであった。本報告では、そうした黎明期の日本の社会主義と早稲田大学との多様なかかわりを明らかにする。

1) 初期社会主義のグローバルな基礎：社会主義は、その「産地」によって性質を異にする。そして社会主義を「輸入」学問としてスタートさせた日本もまた、例外ではない。そうした差異がなぜ生じ、それがどのような意味をもったのか、グローバルな視座から、当時の日本社会の特質を検討しつつ明らかにする。

- ・ 安部磯雄（1865-1947）のアメリカ：『社会問題解釈法』（1901）の読解を中心に、アメリカの社会福音主義と日本の社会主義との連関を考える。
- ・ 煙山専太郎（1877-1954）のロシア：『近世無政府主義』（1902）の読解を中心に、ヨーロッパ、ロシアにおける無政府主義、虚無主義と社会主義とのかかわり、その日本との連関について考える。

2) 初期社会主義の社会的背景：「輸入」学問であった社会主義を、その受け手は、なぜ、どのように受け止め、それをどのようにみずからの生活に生かそうとしたのか。1900年代の早稲田大学を具体例として、その社会的背景を探る。

- ・ 「時代閉塞の現状」：早稲田大学への改称(1902)から、明治の終わりまでの学生を取り巻く時代状況を追う。
- ・ 多様な学生、多様な社会主義：当時の早稲田には、いわゆる正規学生のほかに、聴講生や校外生として、多様な学生が学んでいた。そのなかには、北一輝や大杉栄などの意外な名前を見いだすことができる。

3) 初期社会主義の創造的展開：第一次世界大戦が終了以降、日本の民主主義運動は、大正デモクラシーと呼ばれる興隆期を迎えた。この時期の思想と運動を、早稲田大学に焦点をあてふり返し、こんにちまで受けつがれるべきその「反骨」の遺産を展望する。

- ・ 運動者たち：当時結成された多くの社会主義団体のうち、早大建設者同盟は、東大新人会と双壁をなす有力な学生組織であった。建設者同盟の活動と思想を概観し、運動と早稲田大学の関係を考える。
- ・ 越境者たち：早稲田大学はまた、アジアから多くの留学生を受け入れてきたことでも知られている。こうした留学生のなかには、祖国の民主化や解放のため活躍した人物も多い。そうした留学生の思想と行動を概観しつつ、早稲田大学とアジアとのつながりを展望する。